平成５年度
市原市内遺跡発掘調査報告

東官台遺跡（とうかんだい）

溝谷遺跡（みぞさく）

月崎寺の台遺跡（つきざきてらのだい）

菊間深道遺跡（きくまふかみち）

1994・3

市原市教育委員会

序　　文

市原市は房総半島の中ほどにあって、温暖な気候と豊かな自然とに恵まれ、古くより多くの人々が生活を営んできたところであります。

このことは、県下でも有数の貝塚であります山倉天王貝塚や西広貝塚などをはじめとして、「王賜」銘鉄剣が発見されました稲荷台一号墳さらには奈良時代中頃に造営がなされました国指定史跡上総国分僧寺跡・国分尼寺跡などに代表されるところであります。

一方、本市は首都圏に位置することから、地域開発が急速に進展しております。地域開発は、現代に生きる住民にとってより良い生活環境を提供するものでありますが、その反面、祖先が残してきた貴重な文化遺産の破壊につながることがあり、文化財保護と開発との調和をはかりつつ、これらを後世の人々に伝えていかなければならないところであります。

このような状況の中で、今回国庫及び県費の補助を受けまして、市内に所在する遺跡について開発との調和をはかるべく調査を実施し、遺跡の性格などを把握することができました。本書はその成果をまとめたものであり、文化財の啓蒙と普及に広く活用されることを願うものであります。

最後に、今回の調査を実施するにあたりご指導・ご協力を賜りました文化庁・千葉県教育庁文化課・財団法人市原市文化財センターならびに関係諸機関に対しまして、心より感謝を申し上げる次第であります。

平成６年３月

市原市教育委員会
教育長　植草久善

例　　言

1　本書は国費および県費の補助を受けて市原市教育委員会が主体となり実施した市内に所在する遺跡における発掘調査の報告である。

2　発掘調査および整理事業は文化庁の国庫補助事業として補助金を受けた市原市教育委員会の依頼により、財団法人市原市文化財センターが実施し、報告書刊行については市原市教育委員会で行った。

3　今年度実施した発掘調査は下記のとおりである。

⑴　東官台遺跡（センター調査コード172）市原市神崎字東官台383,384,385,386,387,388,391

調　　査　神崎町会の町会広場造成に伴う確認調査で、工事に先行して調査対象面積2768.56㎡のうち330㎡を発掘した。

調査期間　平成５年６月16日～７月13日

⑵　溝谷遺跡（センター調査コード173）　市原市高倉字溝谷289

調　　査　高倉町会の町会広場造成に伴う確認調査で、工事に先行して、調査対象面積1026㎡のうち100㎡を発掘した。

調査期間　平成５年７月14日～７月20日

⑶　月崎寺の台遺跡（センター調査コード174）　市原市月崎字寺の台1096－2

調　　査　永昌寺墓地造成に伴う確認調査で、工事に先行して、調査対象面積1214㎡の内120㎡を発掘した。

調査期間　平成５年７月21日～８月５日

⑷　菊間深道遺跡（センター調査コード179）　市原市菊間1973番地の一部

調　　査　社会福祉施設建設に伴う確認調査で、工事に先行して、調査対象面積1174㎡のうち150㎡を発掘した。

調査期間　　平成５年11月25日～12月13日

4　本書の原稿執筆は、高橋康男が行った。

5　本書に使用した地形図は、国土地理院発行の５万分の１地形図「千葉」「東金」「姉崎」「茂原」「大多喜」「上総大原」、市原市発行の1／2500地形図Ｐ－６である。また、市原市埋蔵文化財分布地図も使用した。

6　本書では調査範囲と遺構配置図および遺構平面図中の北は磁北を示し、遺構断面図中の高さは、調査対象地内に仮設した基準杭の高さとの相対値を示すことを原則としている。

本　文　目　次

序文
例言
第１章　調査遺跡の概要と環境 …… 1
第２章　東官台遺跡 …… 5
第３章　溝谷遺跡 …… 15
第４章　月崎寺の台遺跡 …… 17
第５章　菊間深道遺跡 …… 21
注・参考文献 …… 24

挿　図　目　次

第１章　第１図　平成５年度「市内遺跡」調査位置図 …… 2
第２図　東官台遺跡と周辺の遺跡 …… 3
第３図　溝谷遺跡と周辺の遺跡 …… 3
第４図　月崎寺の台遺跡と周辺の遺跡 …… 4
第５図　菊間深道遺跡と周辺の遺跡 …… 4
第２章　第６図　東官台遺跡全体図 …… 5
第７・８図　遺構実測図(1)・(2) …… 7・8
第９図～第12図　出土遺物実測図(1)～(4) …… 9～12
第13図　墓壙実測図 …… 13
第３章　第14図　溝谷遺跡周辺地形図 …… 15
第15図　溝谷遺跡全体図 …… 15
第16図　出土遺物実測図 …… 16
第４章　第17図　月崎寺の台遺跡全体図 …… 17
第18図～第20図　出土遺物実測図(1)～(3) …… 18～20
第５章　第21図　菊間深道遺跡全体図 …… 21
第22図　出土遺物実測図 …… 23

写真図版目次

図版１・２　東官台遺跡
図版３　溝谷遺跡・月崎寺の台遺跡
図版４　月崎寺の台遺跡
図版５　菊間深道遺跡

第１章　調査遺跡の概要と環境

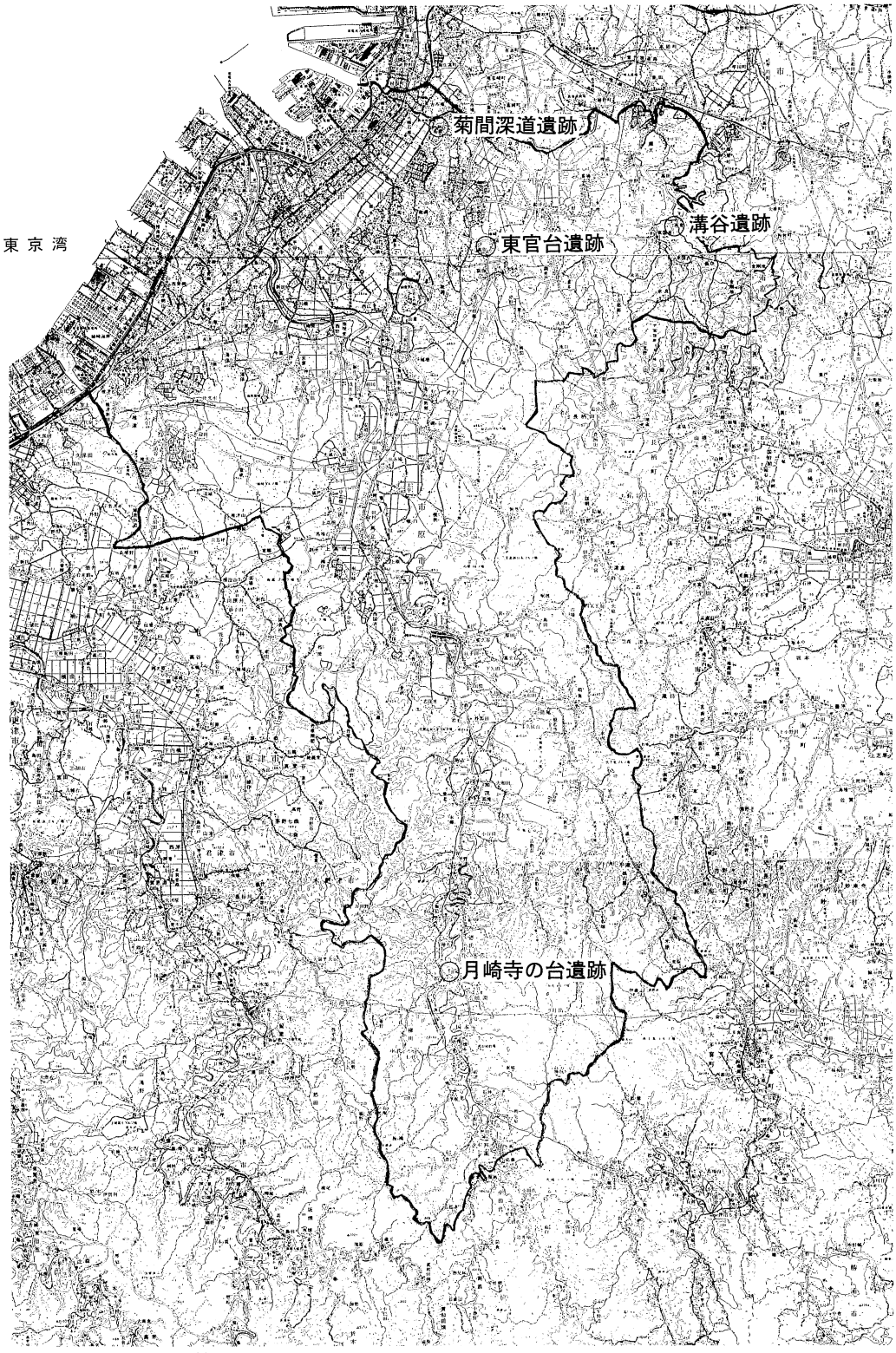
平成５年度市内遺跡発掘調査事業の対象となったのは、市北部３か所、同南部１か所の計４か所であった。以下には調査順にしたがって、その概要を記す。なお、所在地・調査対象地・調査期間については例言に掲げたとおりである。

神崎・東官台遺跡は、村田川支流の神崎川の中流左岸の標高約50ｍの台地上に位置する。本遺跡より上流の地区には左岸には小田部新地遺跡[1]があり、弥生時代中期宮の台式期から後期にかけてのの集落・墓地などが調査されており、また右岸では、小田部古墳を含む小田部向原遺跡[2]の調査が行われている。弥生時代中期より、同河川により形成された沖積地を主要な生産基盤として集落が展開していった事が伺われる。右岸に関しては、祭り野遺跡がかつて調査され、また天王台古墳群[3]をふくむ中潤が広遺跡は、現在千葉県文化財センターにより調査が行われている。下鈴野遺跡[4]を含め、台地上の全貌が近い将来明らかになると思われる。

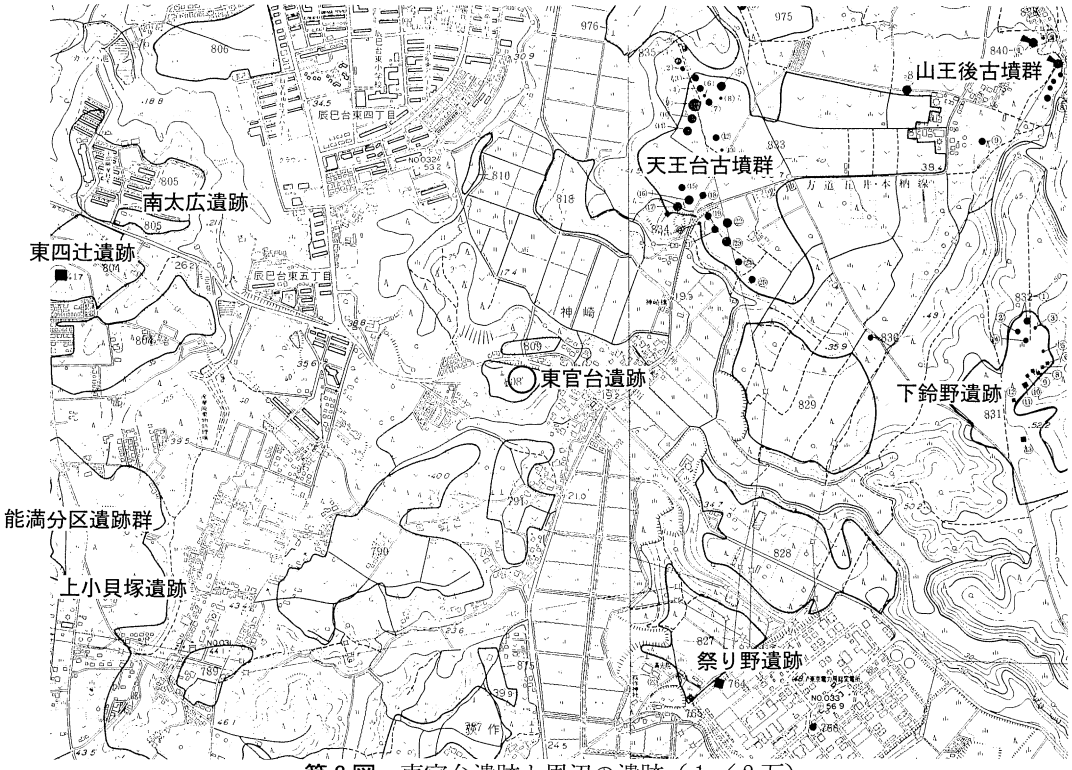
高倉・溝谷遺跡は村田川左岸の小支谷に面した標高約60ｍの台地上に位置する。近くには片岡古墳群等の遺跡の存在が知られているが、概して調査例は少なく、わずかに弥生時代から古墳時代にかけての東国吉川中遺跡[5]が調査された例を挙げ得るのみである。

月崎寺の台遺跡は、養老川上流左岸の標高約90ｍの台地上に位置する。かつて縄文時代後期堀の内式期の集落の一部を調査した飯給・道生堀遺跡[6]が、これまでの養老川流域の調査の最南端であったが今回の調査は更に上流となり、市原市における最南部の調査となった。遺跡に隣接する永昌寺の境内ではかつて布目瓦が採集されたと言われている。ただし、調査時点では縄文土器の散布は認められたが、瓦あるいは奈良・平安時代の所産と思われる遺物の散布は認められなかった。

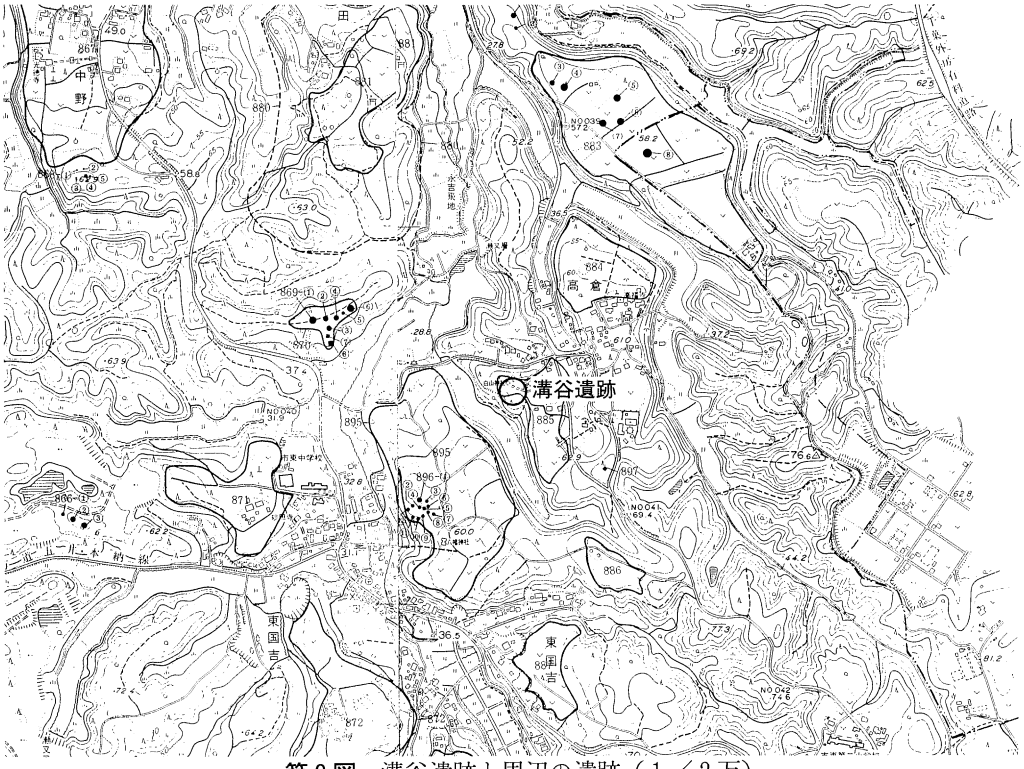
菊間深道遺跡は、かつて千葉県重要遺跡百選に選ばれた、東関山古墳に隣接する箇所に存在する。東関山古墳は、前方部が比較的発達した、全長約60ｍの前方後円墳である。ただし、航空写真から判断するに後円部東側が削られている可能性が高く、本来の規模は現状を上回ると判断される。菊間国造の本拠地と目される村田川下流左岸の台地上には、市指定文化財である菊間天神山古墳・姫宮古墳などで構成される菊間古墳群が展開している。約20年前には千葉県都市公社文化財調査事務所により弥生時代中期を中心とする集落である菊間遺跡、４世紀代の前方後方墳である新皇塚古墳が調査されている[7]。古墳群の築造順序等は不明であるが、台地先端の新皇塚古墳から順次台地内部に入り込んで来ると思われ、途中の段階は今後の調査等に委ねざるをえないが、権現山古墳が東関山古墳より先行し、東関山古墳の築造をもって、菊間古墳群の展開は一応の終結を見るものと考えられる。なお、のちには南方で菊間廃寺[9]の出現をみるところから、生産活動は連綿と継続していたものとみられる。ただし、集落に関しては上述の菊間遺跡、菊間手永遺跡[8]においてその一端を伺わせているに過ぎない。



第１図　平成５年度「市内遺跡」調査位置図（１／20万）

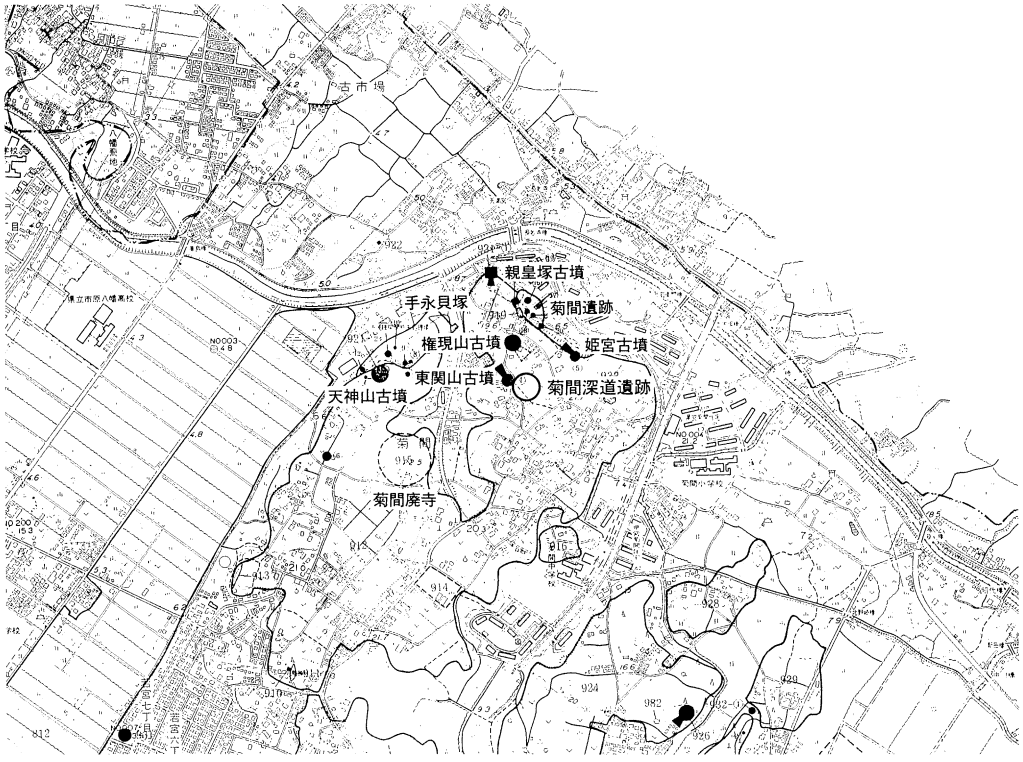


第２図　東官台遺跡と周辺の遺跡（１／２万）



第３図　溝谷遺跡と周辺の遺跡（１／２万）

第４図　月崎寺の台遺跡と周辺の遺跡（１／２万）



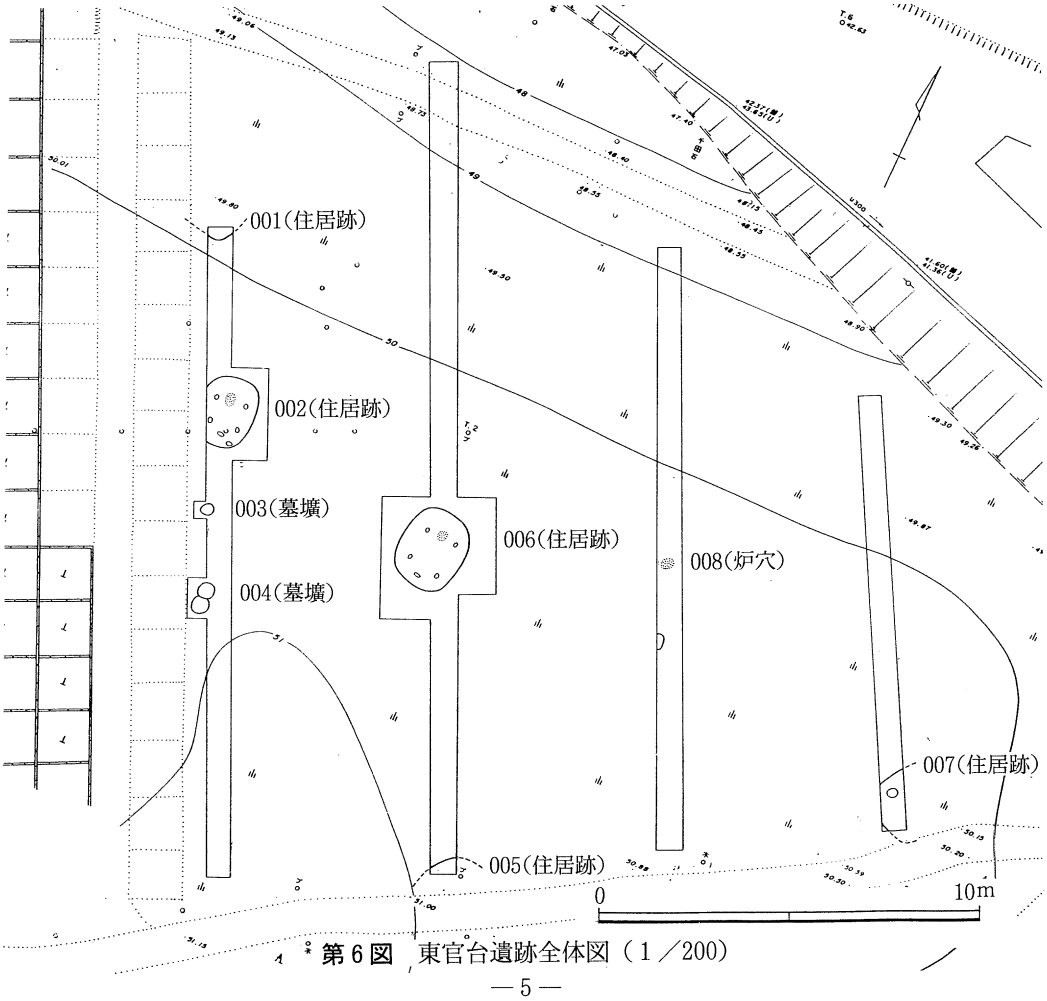
第５図　菊間深道遺跡と周辺の遺跡（１／２万）

第2章　東官台遺跡

調査の経過

調査は約2800㎡を対象に実施した。調査着手時点では、当該地区は荒れ地となっていたが、近世には墓地が営まれていたことが明らかであり、後に改葬して調査地西側に隣接する集団墓地となっている。調査期間中、近在の方より、明治初期の絵図面の写しを戴いたが、そこに記載の墓道は調査時点でもほとんど変わりがなくまさに調査対象地を描いたものであることが読み取れた。そこには墓道、十数個におよぶ土饅頭、墓標が描かれており、一帯が墓地であることが確認された。また、調査地の南東隅に近い部分に「胞塚」と記された石碑が若干の盛土の上に据えられており、地元では「へそなづか」とよんでいるとのことであり、つい最近まで胎盤を収めていたとのことであった。この塚については既に機能していないものであるが、現状のまま留めていく方針とし、発掘区の設定は行わないこととした。

調査はトレンチ調査を先行した。調査対象地の形状にあわせて南北方向に４本設定し、西か



第６図　東官台遺跡全体図（１／200）

ら順次１～４とトレンチ番号を付した。第１トレンチでは北端および中央やや北よりの部分で住居跡が検出された。この２軒はいずれも弥生時代後期の土器を出土した。また中央および北寄りの部分のトレンチの西壁にかかって近世以降の所産と思われる墓壙が検出された。これら墓壙の、内最も北側で検出された１基はすり鉢を頭にのせた状態で人骨が出土した。第２トレンチでは中央やや南寄りの部分および南端の部分で住居跡が検出された。何れの住居からも弥生時代後期の土器を出土した。第３トレンチではほぼ中央で炉穴が１基検出され、北寄りの傾斜地ではピット群が検出された。なお、炉穴からの遺物の出土はなかった。第４トレンチでは南端に近い部分で住居跡が検出された。この住居跡からは弥生時代後期の土器が出土した。

以上の様な状況をふまえて、現地において協議をおこなった結果、第１および第２トレンチの中央部分はのちの工事に際して、削平される可能性が強いところから、該当箇所において検出された住居については、トレンチを拡張してその全体を把握する方針となった。また、墓壙については、さらなる人骨の検出が予想されたところでもあり、全体を把握するとともに人骨の分散を防ぐ意味からも全掘するところとなった。

調査した遺構と遺物

住居跡

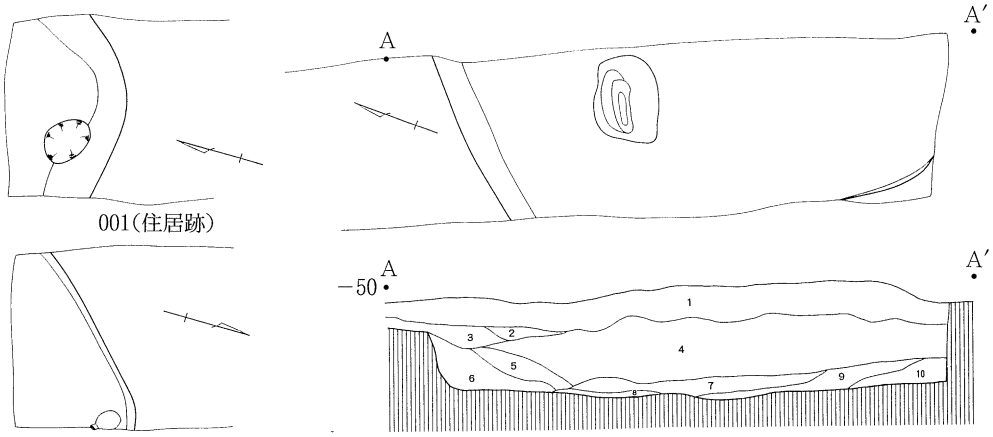
001（住居跡）

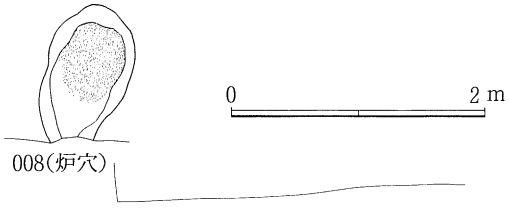
第１トレンチ北端で検出したものである。住居跡の僅かな一角が捉えられたに過ぎず、全体の形態等は不明である。覆土中からは図示するに足る遺物の検出はなかった。

002（住居跡）

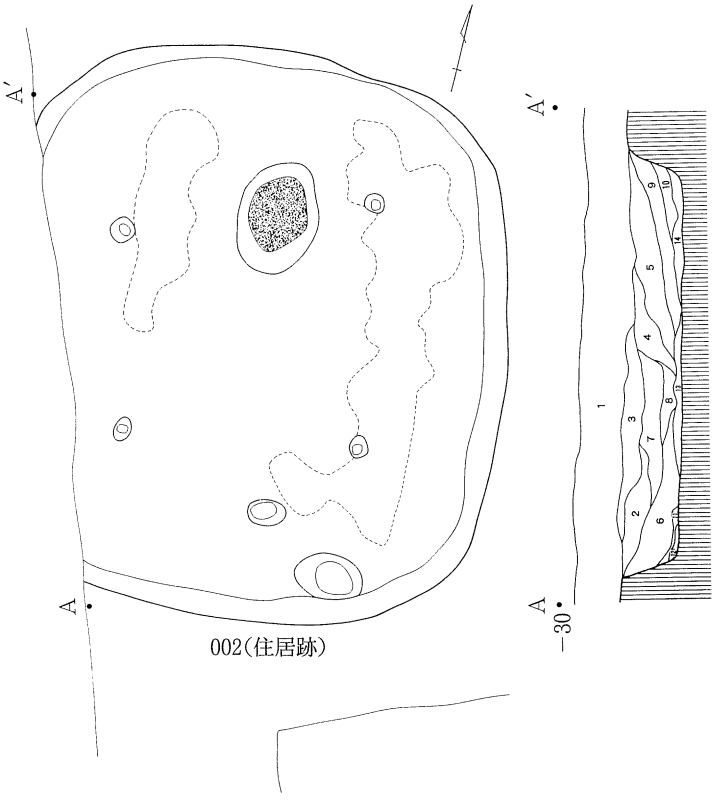
第１トレンチほぼ中央で検出し、東側を拡張したものである。西端部分については拡張しなかったが、ほぼ全体の形状を捉えることができた。主軸を南北から僅かに西に振れる方向に持つ小判形を呈し、長軸で約4.5m、短軸で約４ｍを計る。炉は中央よりやや北寄りで検出された。床の残存状況は良好で炉を中心に硬化面の形成が認められた。なお、覆土には焼土を多く含み、特に壁際で顕著であり、炭化物の散布も多く見られた。遺物はこの焼土層およびその上層において多く出土した。一括投棄されたものと考えられる。柱穴は床面を精査した結果図示した様な箇所で検出されたが、配置はやや不規則である。南東の柱穴の近くでは貯蔵穴と思われるピットが検出されたが、掘り込みはやや浅く、良好な遺物の出土はなかった。

出土した遺物は、図示した通りであるが、出土した破片資料の接合率はかなり高いほうではなかったかと思われる。なお、一部資料に関しては、後述する 006（住居跡）出土遺物との接合関係が認められた。個別の特徴に関しては、図より判断されたいが、総体として弥生時代後期に属するものと位置づけられよう。口径と胴部径がほぼ等しい輪積み痕を残す甕が主体となるようであるが、逆円錐台形を呈する甕の存在は中期宮の台式の様相を残すものである。



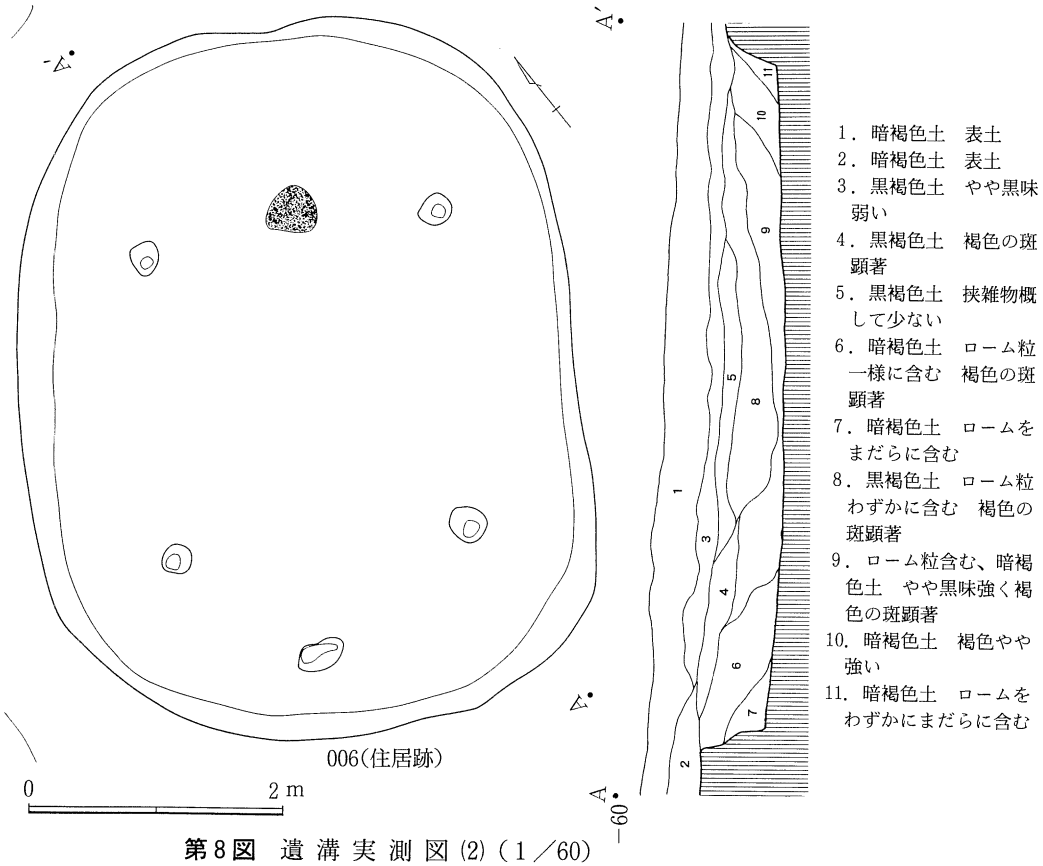


1．暗褐色土（表土）根による撹乱
2．暗褐色土
3．暗褐色土 表土 黒味強い
4．黒褐色土　ローム粒をわずかながら一様に含む
5．暗褐色土　ローム粒をわずかに含む
6．暗褐色土　黄色味強いロームをまだらに含む
7．黒褐色土　ローム粒・ローム小ブロックを含む
8．暗褐色土　ロームブロックを含む
9．暗褐色土　ローム粒をわずかに含む
10．暗褐色土　黄色味やや強い　ロームをまだらに含む



1．暗褐色土（表土）　ややしまり悪い
2．暗褐色土　ロームをわずかに含む
3．暗褐色土（ロームをまだらに含む）
4．暗褐色土　ロームをわずかにまだらに含む
5．暗褐色土　黒味強く、わずかにロームをまだらに含む
6．暗褐色土　黄色味帯び、ローム粒含む
7．暗褐色土　黒褐色土をまだらに含む
8．暗褐色土　黄色味強い
9．暗褐色土　黄色味強く、わずかにローム粒含む
10．暗褐色土　黒味強くわずかにローム粒含む
11．焼　土
12．炭化物（材）
13．暗褐色土　黒味強く、わずかに炭化粒含む
14．暗褐色土　焼土・炭化物を含む

第7図　遺溝実測図(1)（1／60）



第8図　遺溝実測図(2)(1／60)

005（住居跡）

第2トレンチ南端にその一角が検出されたものである。全体の形状は不明である。トレンチ東壁に接する部分で図示したような甕が出土した。他遺構出土の甕に比べ、全体に器壁が厚く、口唇部の刻みも深い感がある。

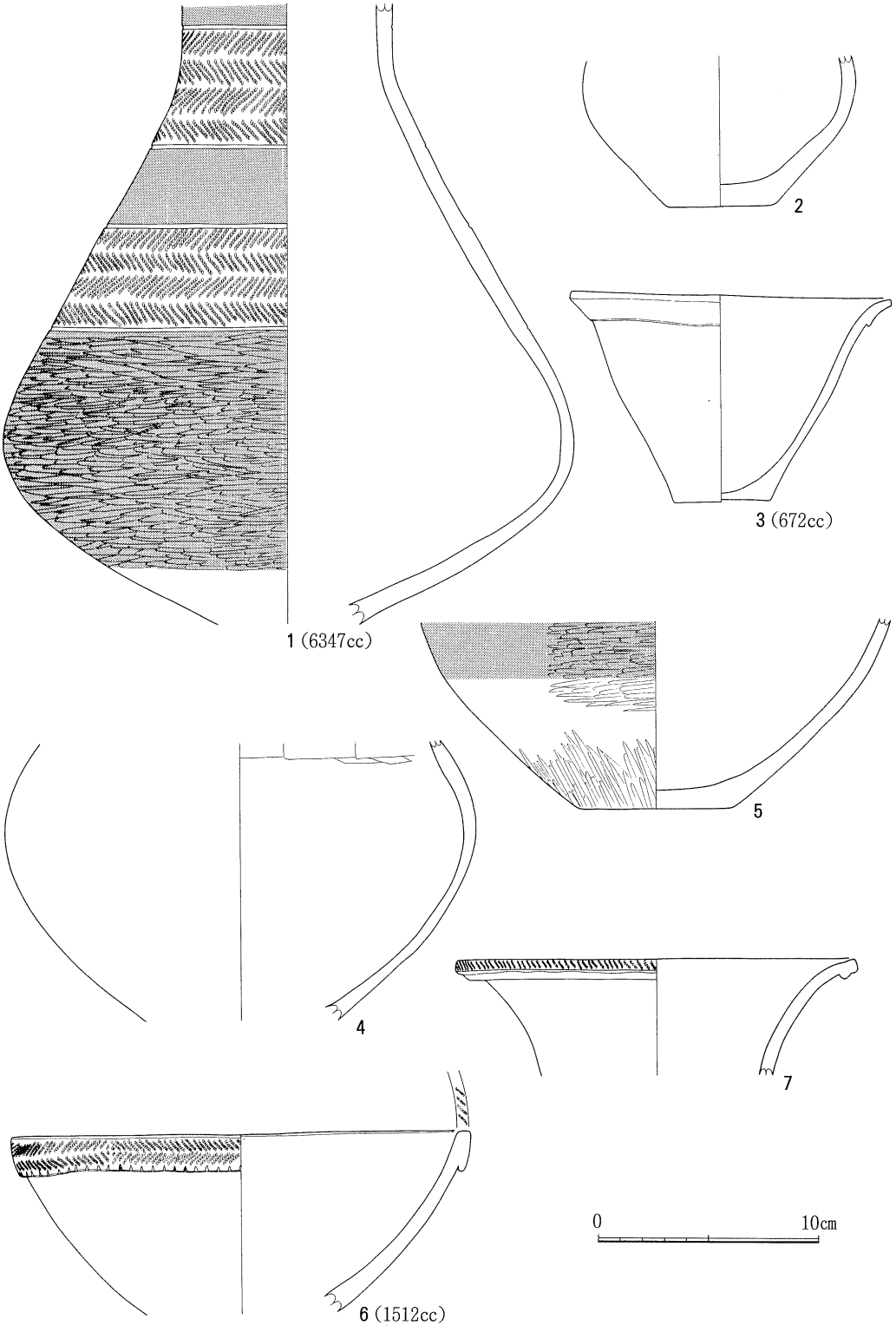
006（住居跡）

第2トレンチほぼ中央で検出し、拡張により全体を把握したものである。前述002より一回り大きい、小判形を呈し、主軸は南北よりやや東に振れる。長軸約5.7m、短軸約4.4mを計る。柱穴は4か所確認しえた。床の残存状況も良好であった。炉については、掘り込みは浅く床面とほぼ同レベルで火床面が捉えられた。遺物は覆土の上層で出土したものである。002に比較するとその出土量はやや疎な感がある。

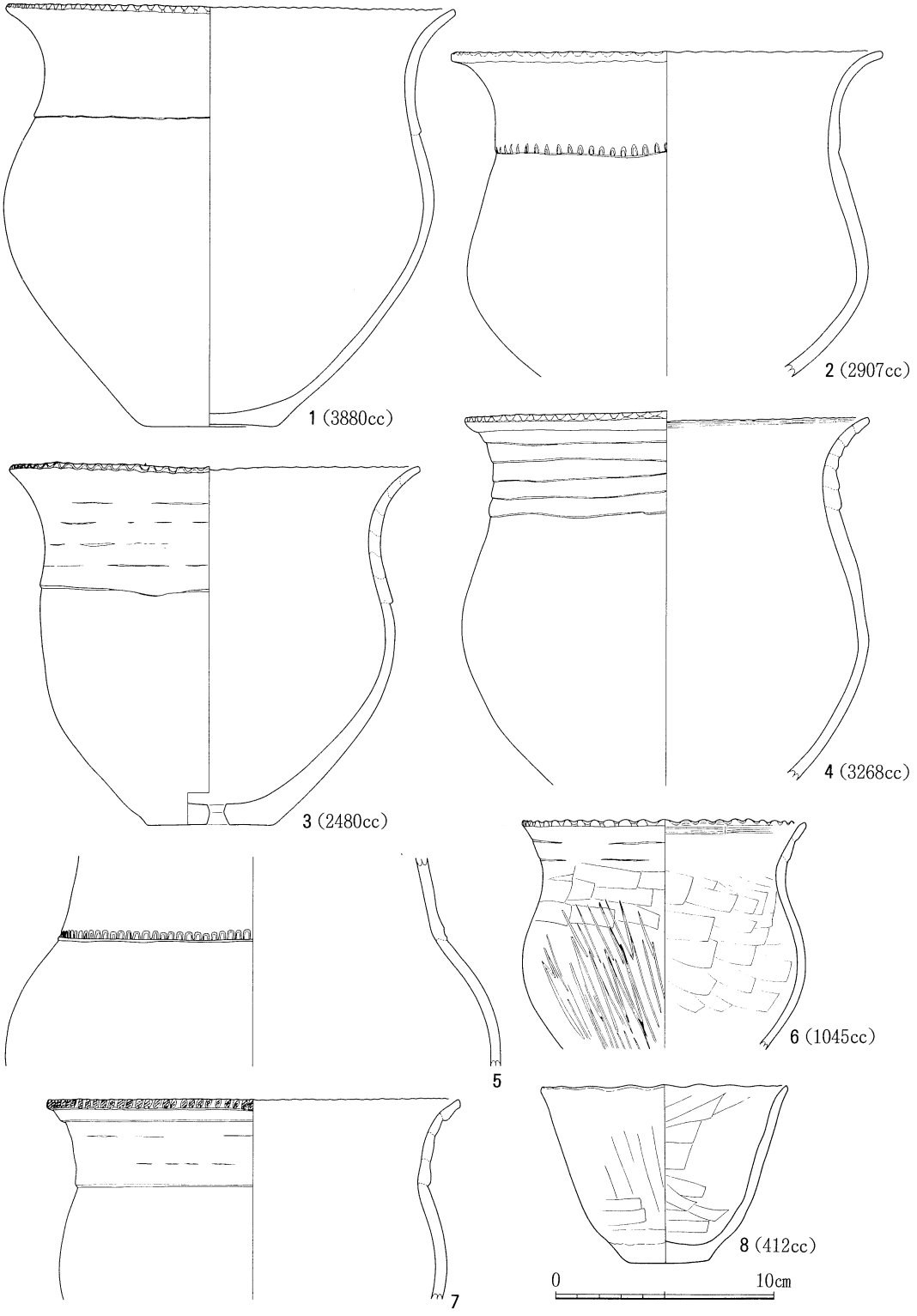
出土した遺物は、図示の通りである。002出土遺物との接合関係が認められるところから、同時期の廃棄と判断すべきものであろう。弥生時代後期の所産と位置づけられよう。

007（住居跡）

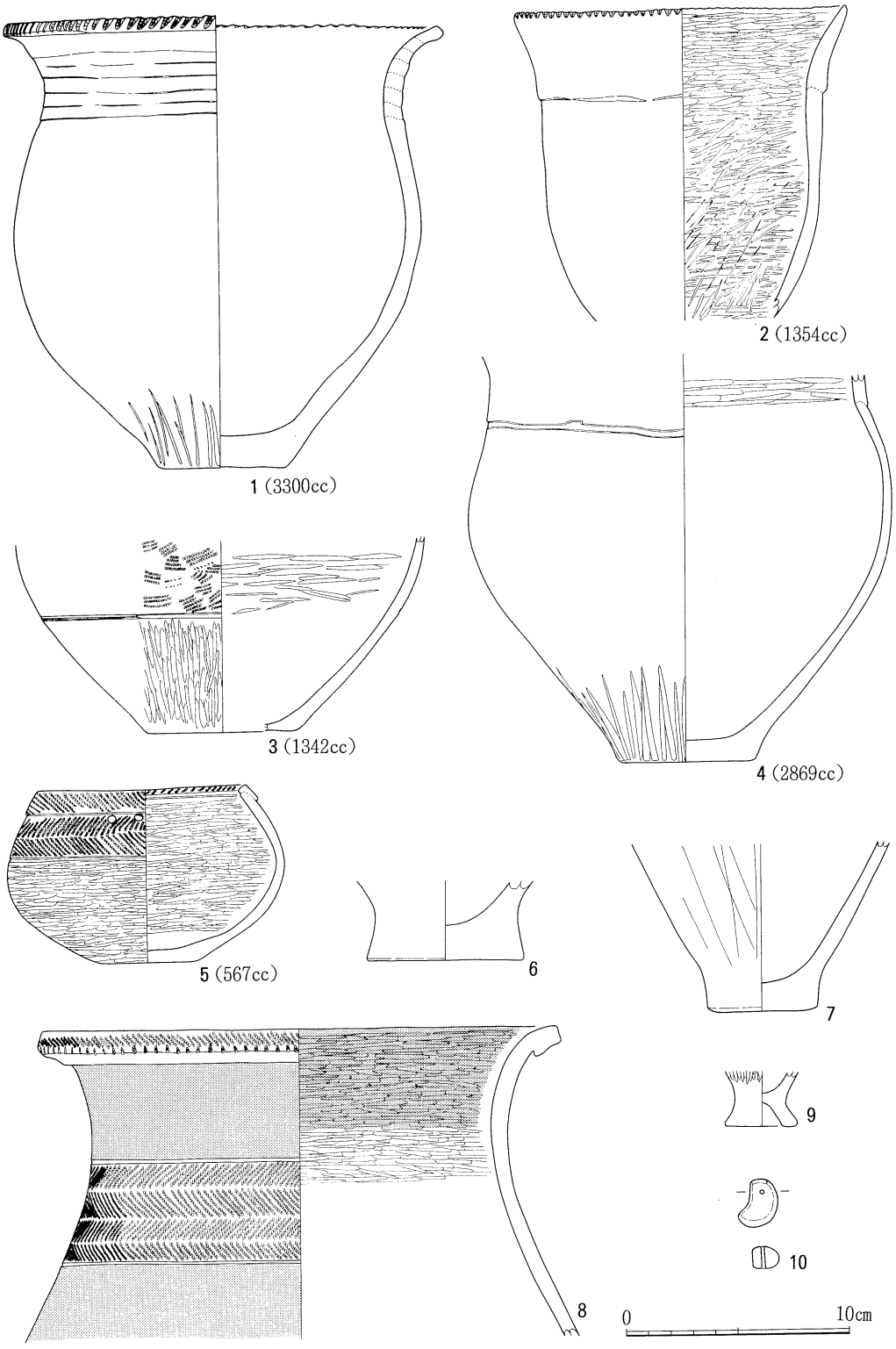
第4トレンチ南半部分で検出された。おそらく小判型を呈するものと思われ、規模的には、



第9図　出土遺物実測図(1)（いずれも002）



第10図　出土遺物実測図(2)（いずれも002）



第11図　出土遺物実測図(3)（1：005，7・9：007，他は006）

第12図　出土遺物実測図(4)（1～12：002，13～26：006）

002に近似するのではないかと考えられる。遺物は、覆土中から小片が出土した程度に留まる。

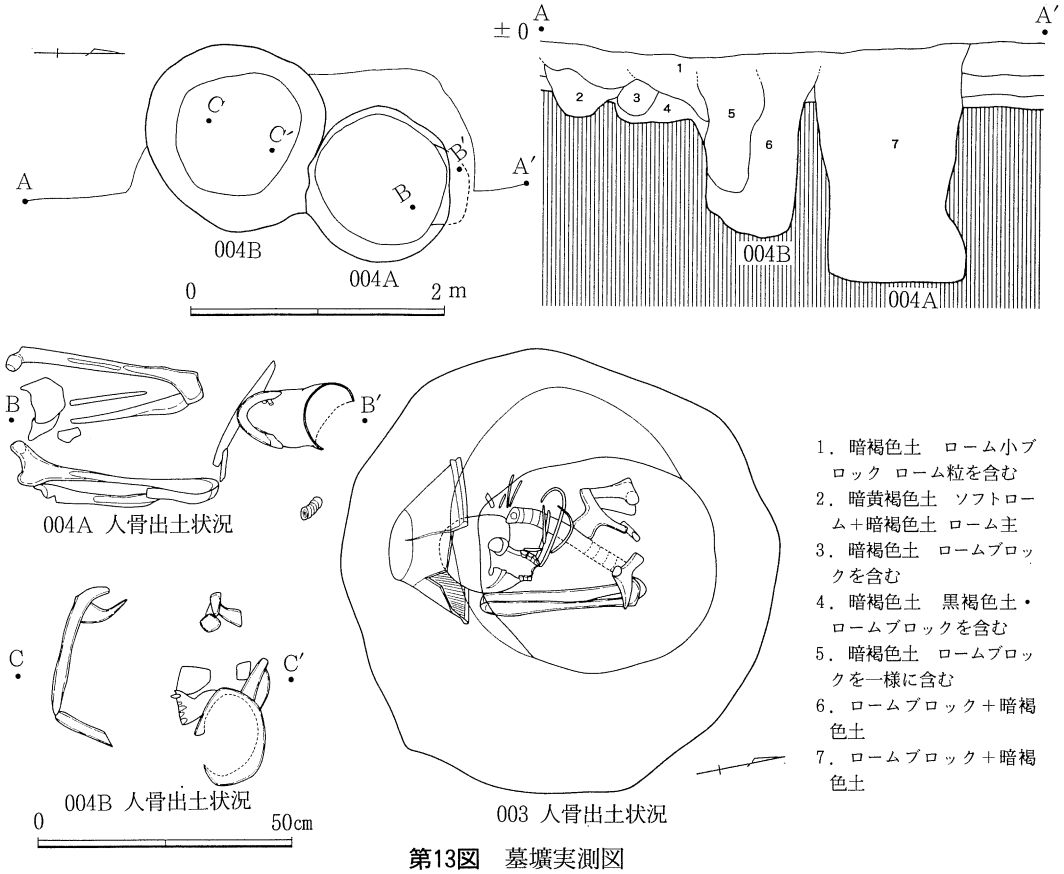
墓壙

003（墓壙）

第１トレンチ中央よりやや北側の部分で検出された。トレンチ設定段階では東半のみが検出されたが、のち拡張して全体を検出した。

上端で直径約0.9ｍの円形を呈し、底部に行くにしたがって径は減少する、すり鉢形の掘り込みである。深さは確認面から約50㎝と、後に述べる墓壙と比較するとかなり浅いものと言える。この墓壙からは、すり鉢を頭に被せた状態で人骨が出土した。頭位は南向きで、埋葬姿勢は、膝を曲げてうつ伏せになった状態であった。この人骨の遺存状況は良好ではなく、また性別・年令等の個体属性は、分析を経ていないので不明である。この点については、後にふれる２基の墓壙より出土した人骨についても同様である。なお地元の方の話によれば、盆の頃に亡くなった人を埋葬する際、すり鉢を被せる習慣があったとのことである。

出土したすり鉢は紙面の都合上図示は割愛するが、目が比較的密に走っているところから、明治時代以降の所産と思われる。そのほかには、副葬品の出土はなかった。



第13図　墓壙実測図

004A、004B（墓壙）

第１トレンチのほぼ中央で検出された。トレンチ調査段階では円形のプランの一部が確認されたのみであった。ロームブロックを多く含む覆土および平面形、またかつて墓地であったことから墓壙であろうことが推測され、全体を検出するにいたった。２つの墓壙は地表近くでは重複して掘られているが、底面までは重複していない。いずれの墓壙からも、人骨が検出されている。

北側の004Aは、上端の直径約1.1ｍ、確認面からの深さは約1.8ｍで、底面はやや小さい円形を呈するが、基本的には円筒形と言いうる形状である。底面の北側の壁はさらに北側に掘り進められており、この部分に頭部がおさまる形で人骨が検出された。当初より、当該部分に頭部を挿入することが考えられていたと判断される。頭頂を北に向け、また下顎骨が上方にあるところから、003同様の埋葬姿勢であったと判断される。なお、経験的にこのような円形の比較的深い墓壙については座棺と考えてきたとこでろであるが、本埋葬例を見るかぎり、座棺は想起しがたく、また寝棺も想定しがたいところであり、したがって無棺と考えざるを得ない。頭蓋骨の脇から出土した銅銭から江戸時代以降の埋葬と考えられるが、無棺の埋葬が近世以降の埋葬の一般的な有り方として認められているかどうかについては、言及するだけの材料を持ち合わせていない。

004Bは形態的にも、規模的にも004Aと類似し、若干掘り込みの深さを異にする程度である。人骨は、大腿骨が直立する状態で検出された。このほか、頭蓋骨、脚部のものと思われる骨が数片出土しているが、遺存状態はよくなかった。直立した状態で大腿骨が検出されたところから、座棺による埋葬と判断される。また、副葬品等の出土はなかった。

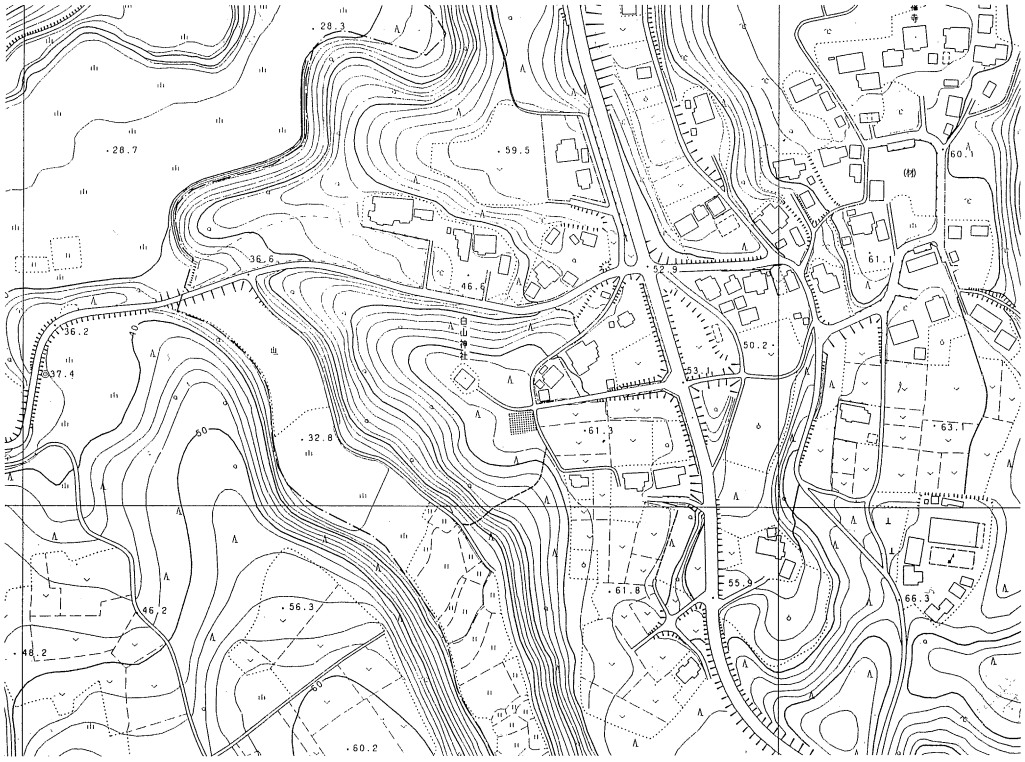
炉穴

008（炉穴）

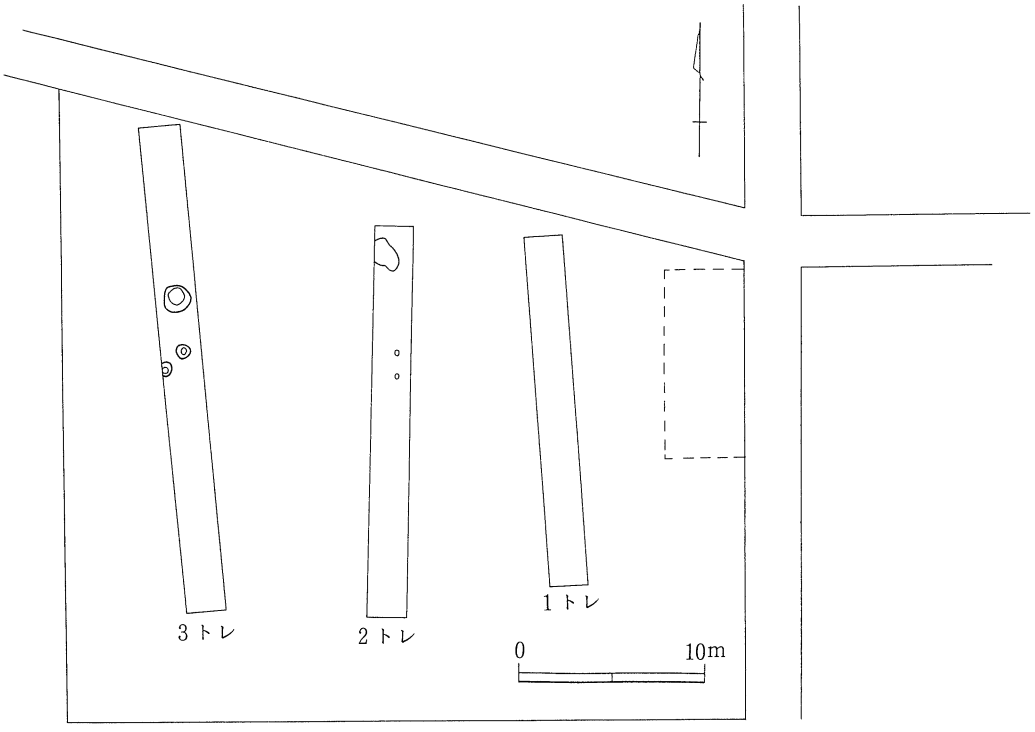
第３トレンチのほぼ中央で単独で検出された。長軸約１ｍ、短軸約70㎝の卵形を呈し、掘り込みは約20㎝で中央部分が酸化し赤色を呈していた。遺物の出土はなく、規模的にも小さいところから、縄文時代早期に通有の炉穴とは異なるかも知れない。

小　結

今回の調査により、弥生時代後期の集落の存在と、近世墓地の一端が明らかになった。住居跡から出土した土器は、覆土からの出土品が多数を占めているが、近世の墓域であったことも幸いして開墾等の土の移動の影響を受けていないこと、住居跡同士の切り合いがないこと等からその一括性をもって資料的価値を減じせしめるものではないと考えられる。今回出土した弥生土器の編年的位置づけについては、弥生時代後期の中でも古い段階を中心とするものではないかと考えているが、正確な位置づけについては今後の周辺地域の資料の蓄積および研究の進展に委ねることとしたい。



第14図　溝谷遺跡周辺地形図（1／5000）



第15図　溝谷遺跡全体図（1／400）

第3章　溝　谷　遺　跡

調査の経過

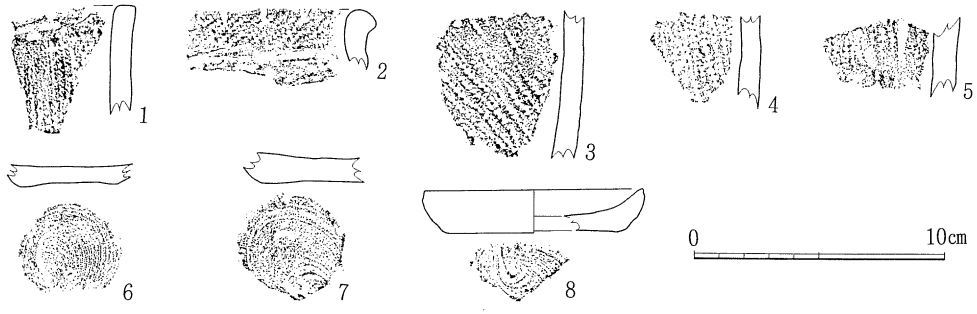
調査は約1000㎡を対象に実施した。調査着手直前段階では針葉樹が植えられていたが、白山神社の直前に位置し、境内の一部を占めていたものと思われる。対象地の10%に対し、3本のトレンチを設定した。時期不明の土坑数基と縄文時代早期の土器とカワラケの出土が認められたが、良好な遺構の検出はなかった。よって、拡張等の処置は行わず、調査は終了した。

遺　　物

出土した遺物は、図示したとおりである。縄文時代早期の撚糸文系の土器とカワラケが出土している。撚糸文系の土器は口唇部に撚糸の押圧を加えるもの(2)と無文の物(1)の2者がある。これら以外に出土したのはいずれも、全体に砂質で淡褐色を呈し、底部は回転糸切り無調整である通常カワラケと称している土器である。これら土器の生産と流通の実態あるいは年代的位置は曖昧としている現状があり、ここでも特に言及しうる状況にははない。ただし、白山神社の境内に位置するところから、神社の創建以降のものではないかと考えられる。ただし、この神社の創建そのものが不詳であるところから、結局のところ年代的位置は不確定である。

小　　結

かつて市東村といわれた周辺一帯については、いまだに歴史の実像が不明な部分も多い。今回の調査で、その空白の一部でも埋めることができたかというと、残念ながらかかる結論は導き難い。ただし、遺構の検出には結びつかなかったものの、縄文時代早期の遺物が検出されたことは近隣に居住の痕跡が存在する可能性を示唆するものであり、また、今後の研究の進展により、カワラケの年代あるいは生産と流通の実体等が明らかになれば、今回の資料が活かされることになろう。その時点において、白山神社の位置づけさらに地域の歴史の実像が多少なりとも広がりをもって見渡すことも可能になると考えられる。かかる意味から、今回の調査は必ずしも満足の行く資料の蓄積にはつながらなかったものの、今後の周辺の開発に際して、一層の留意を喚起するものと位置づけられよう。



第16図　遺　物　実　測　図

第４章　月崎寺の台遺跡

調査の経過

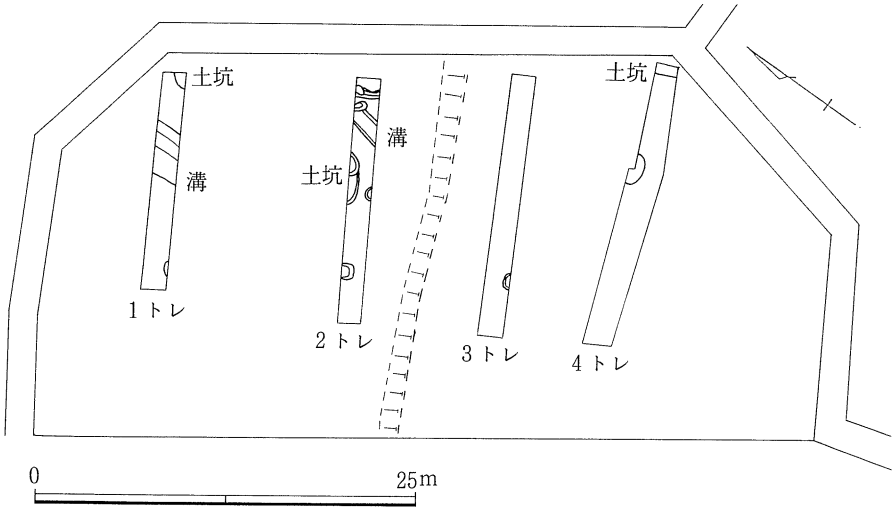
遺跡は、養老川本流右岸直上の台地上に位置することは、冒頭にもふれた通りである。遺跡は永昌寺の一角を占めている。なお、この永昌寺は正安元年（1299年）の創建と伝えられるがその時点では現在の寺よりも北方の地点にあったものが、文明13年（1481年）の大風による倒壊を契機に翌年現在の地に移されたとされている[1]。かつて布目瓦が採集されたことはすでにふれたが、上述のような経過をみる限り、永昌寺との関わりの中では位置づけ難い。調査対象地を含む周辺一帯は縄文土器の散布が認められるものの、それ以外は乏しい。

調査対象地は、南北方向に長い台形を呈し、地形的にはほぼ中央で東西方向に走る段差が形成されていた。本来の地形を踏襲して南側が高く、北側が一段低い状況にあった。調査は東西方向のトレンチを上段、下段にそれぞれ２本の計４本を設定し、北側から１～４とトレンチ番号を付した。粘質の強いロームを遺構の確認面としてとらえる方針としたが、各トレンチ毎に土質が異なる感があった。遺物は各トレンチから縄文土器が出土したが、特に上段の２本のトレンチにおいて顕著で全体に南の方ほど出土量を増す傾向がある。第３・第４トレンチでは表土除去段階で相当量の遺物の出土が認められ、重機による表土除去はこの遺物包含層の上面で留めた。この包含層の下層には、良好な遺構の検出は認められなかった。

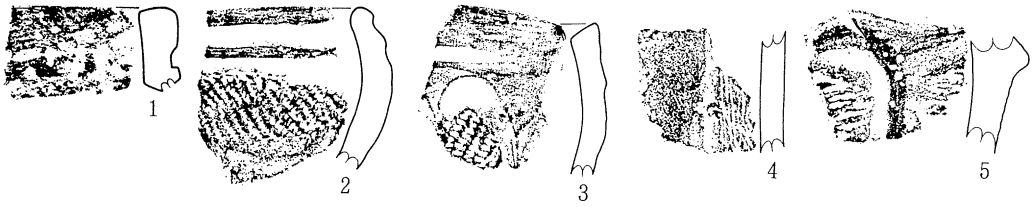
検出した遺構には土坑・溝などがある。これら遺構の時期については、明らかに伴うとしうる遺物の出土がないところから不明とせざるを得ない。

遺　　物

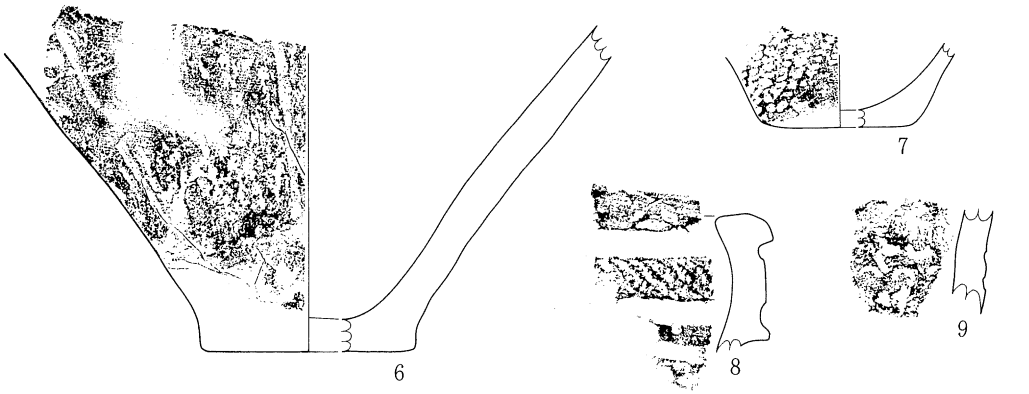
図示したように縄文時代中期加曽利Ｅ式を中心とする土器の出土があった。全体に土器表面あるいは破損部分の磨耗が著しい感がある。これら土器のほかに土器片錘の出土が認められる

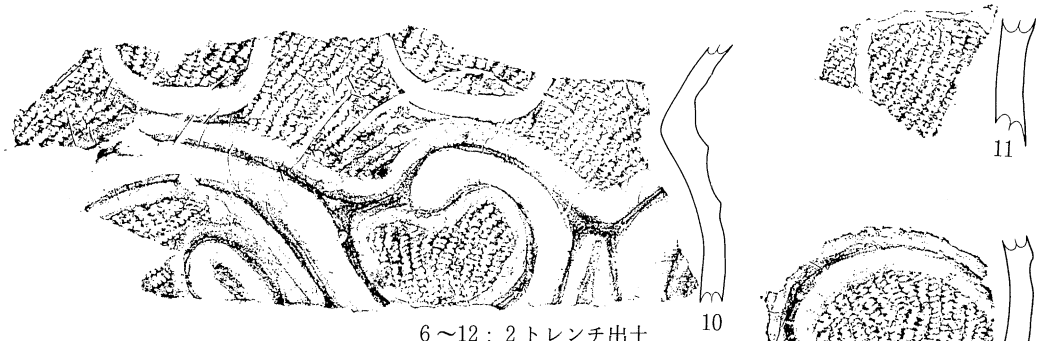


第17図　寺の台遺跡全体図（１／500）



1～5：1トレンチ出土

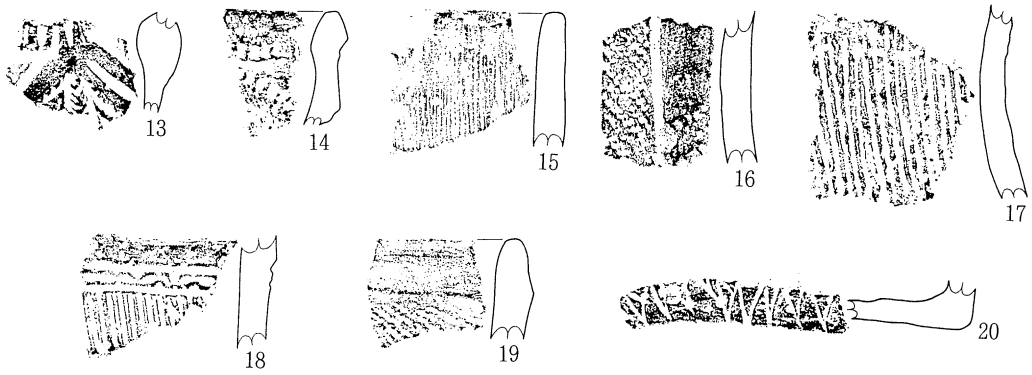




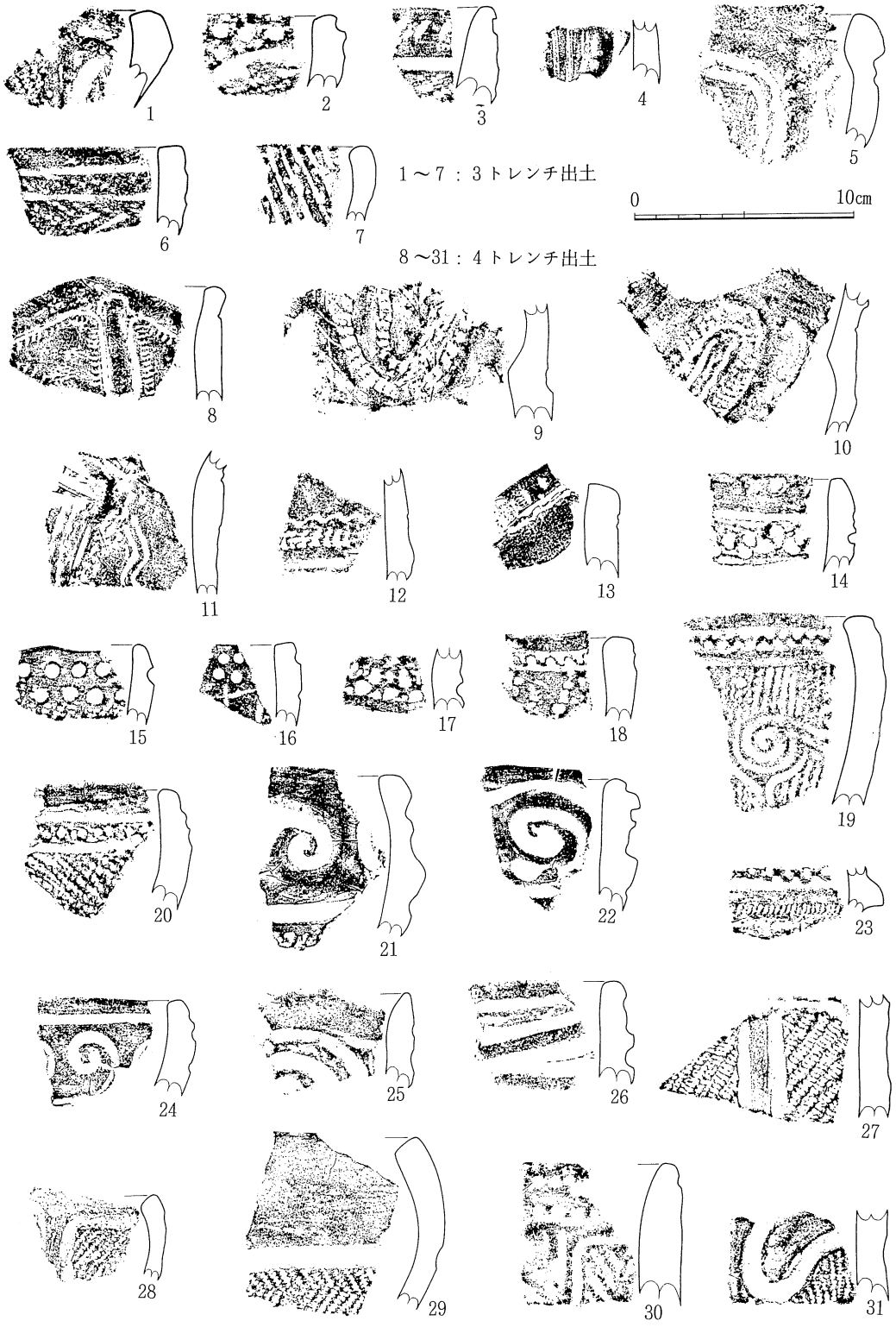
6～12：2トレンチ出土

0　10cm

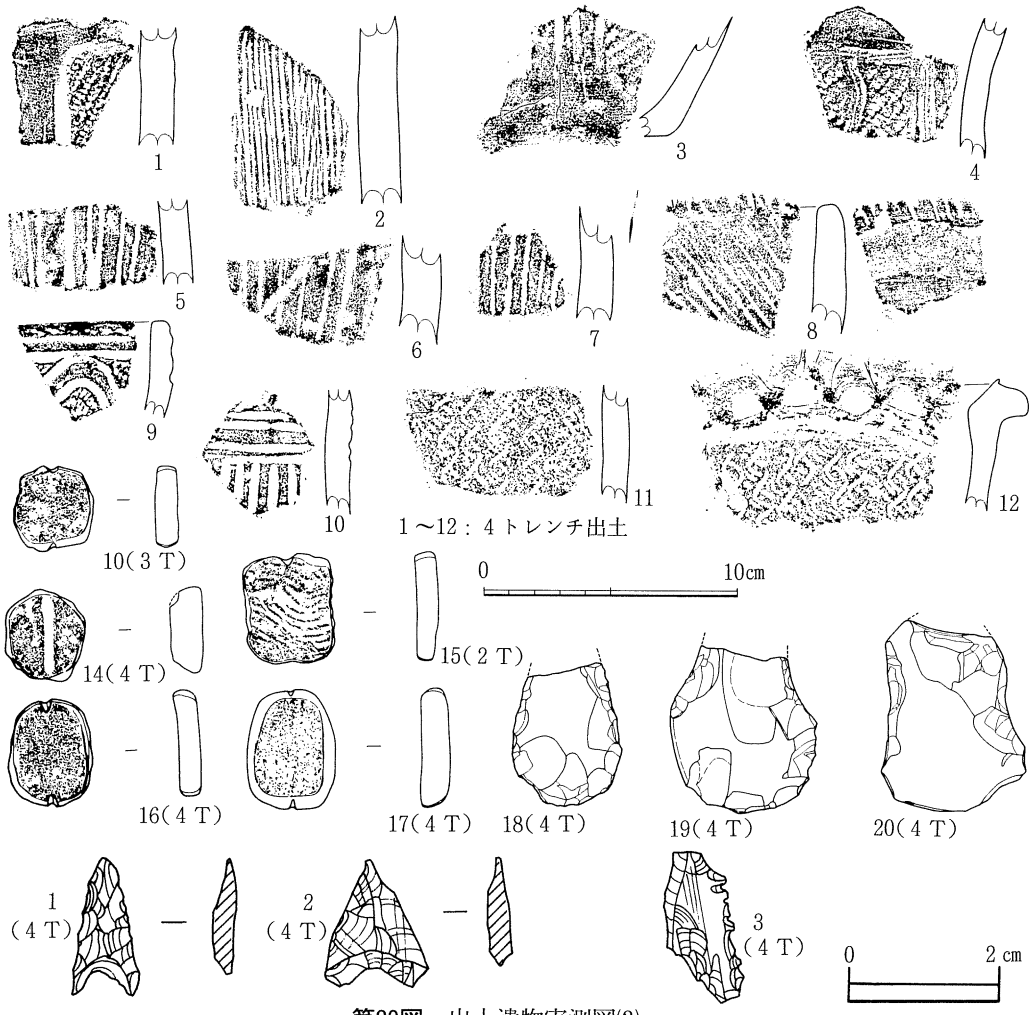
13～20：3トレンチ出土



第18図　出土遺物実測図(1)



第19図　出土遺物実測図(2)



第20図　出土遺物実測図(3)

またいずれも土器片の周縁部を加工し、長軸方向上下一箇所ずつに抉りを施すものである。また、石製品も僅かながら認められた。

小　結

今回の調査において、遺構に伴うものではないにしろ、縄文時代中期の土器が多く検出されたことは、周辺一帯に同時期の集落が展開していることを示唆していると見られる。市原市内においては、山間部における遺跡の調査はかつて飯給地区で実施した以外にいまだ例をみないところであって、実態はほとんど明らかになっていないのが現状である。さらに土器片錘に関して言えば、漁労に伴う遺物と理解しているところであるが、本遺跡の立地から見る限り漁労とは無縁のように思われる。実際に漁労を行っていたのか、あるいは土器片錘の用途についての認識が不十分であるのか、いずれに帰すかは、今後の資料の蓄積をまちたい。少なくとも、山間部にまで活動領域が及んでいたことを如実に示す貴重な資料と位置づけることができよう。

第5章　菊間深道遺跡

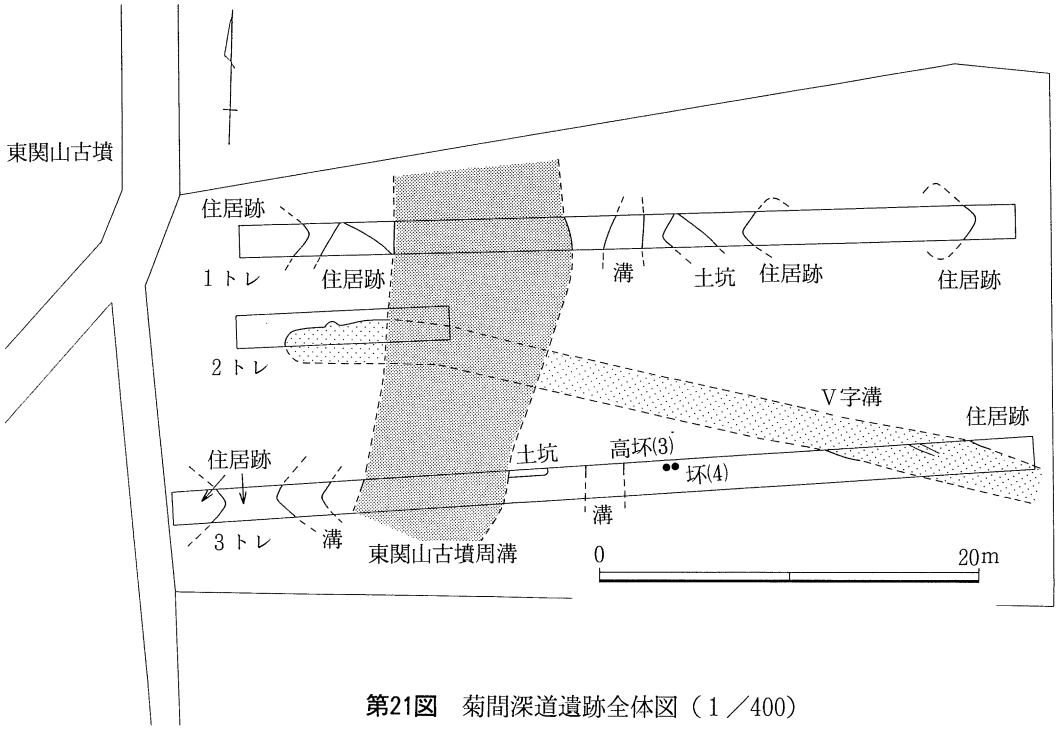
調査の経過

調査の対象となった約1200㎡は、現況は畑で、調査時点でも耕作が継続していた。したがって重機の搬入は行えず、人力による調査で対応することなった。東西に長いほぼ長方形に近い調査対象地と道路を挟んで、東関山古墳の後円部が存在する。この古墳の周溝が調査対象地の西より部分で検出されることが充分に予想されたため、周溝に直交する方向、すなわち東西方向に、当初２本のトレンチを設定し、北側から１・２とトレンチ番号を付した。後円部が後世に改変を受けていることもあって、周溝は、現在の墳丘からやや離れた箇所において検出された。のち、この２本のトレンチ間の耕作を行っていない場所に新たに第３トレンチを設定して、周溝の墳丘側の立ち上がりを再確認した。表土は比較的厚く80cm近い部分もあった。周溝以外の遺構も多く検出され、確認面のロームを露呈しえた部分も少ない。また、耕作土・表土の直下に漸移層を欠く状態でロームは露出する。このローム面に床状の硬化面の形成も認められた。

確認した遺構

東関山古墳周溝

図示した部分で周溝が確認された。調査範囲内では全体に直線的で、わずかに西よりに向かっ



第21図　菊間深道遺跡全体図（１／400）

ていることが伺えるが、後円部に向かって屈曲を開始しているとは言いがたい。しかし、これを東関山古墳以外のものに結びつけることはかえって困難であるところから、同古墳の周溝と位置づけておきたい。この周溝は上端幅約10mをはかる。排土場所確保という作業上の困難もともなって、一部にサブトレンチを設定して断面形をとらえたが、それによると深さは確認面から約2m、周溝内側の傾斜は外側のそれに比べて急であること、また周溝外側の壁は緩い段を伴うものであることが捉えられた。

V字溝

第2トレンチ東端部分から、断面V字形を呈する溝が検出された。トレンチを斜めに横断する形で西北西にのびるものである。第3トレンチにおいて確認された溝は、その延長線上に位置し、同一の遺構であると考えられる。上端幅は約2m、確認面からの深さは、約1.3mを計り、底面が一段溝状に深くなる特徴がある。弥生時代の環濠集落の環濠の形態に類似するものである。この溝の覆土からはほとんど遺物が出土しなかったが、このことは周辺に集落等が大規模に展開する以前に、この溝がすでに埋没していたことを伺わせる。

かつて調査された菊間遺跡の東端においても今回検出した溝に類似する溝が検出されている。この「第4号溝状遺構」と報告されているV字溝と今回検出した溝は、約200mの隔たりがある。また、底面の形状において相違する感がある。これをも一体のものと捉えうるかどうかは、現時点では言及する根拠を欠くが、ひとつの可能性として提示しておきたい。

住居跡

今回の調査で確認した住居跡は、7軒である。トレンチ調査という制約もあって、全体の規模形状が明らかになったものはない。断片的な形態からは、小判形を呈するものが多い感がある。覆土からの遺物は、相当量に及ぶが今回は詳細な検討はしえなかった。

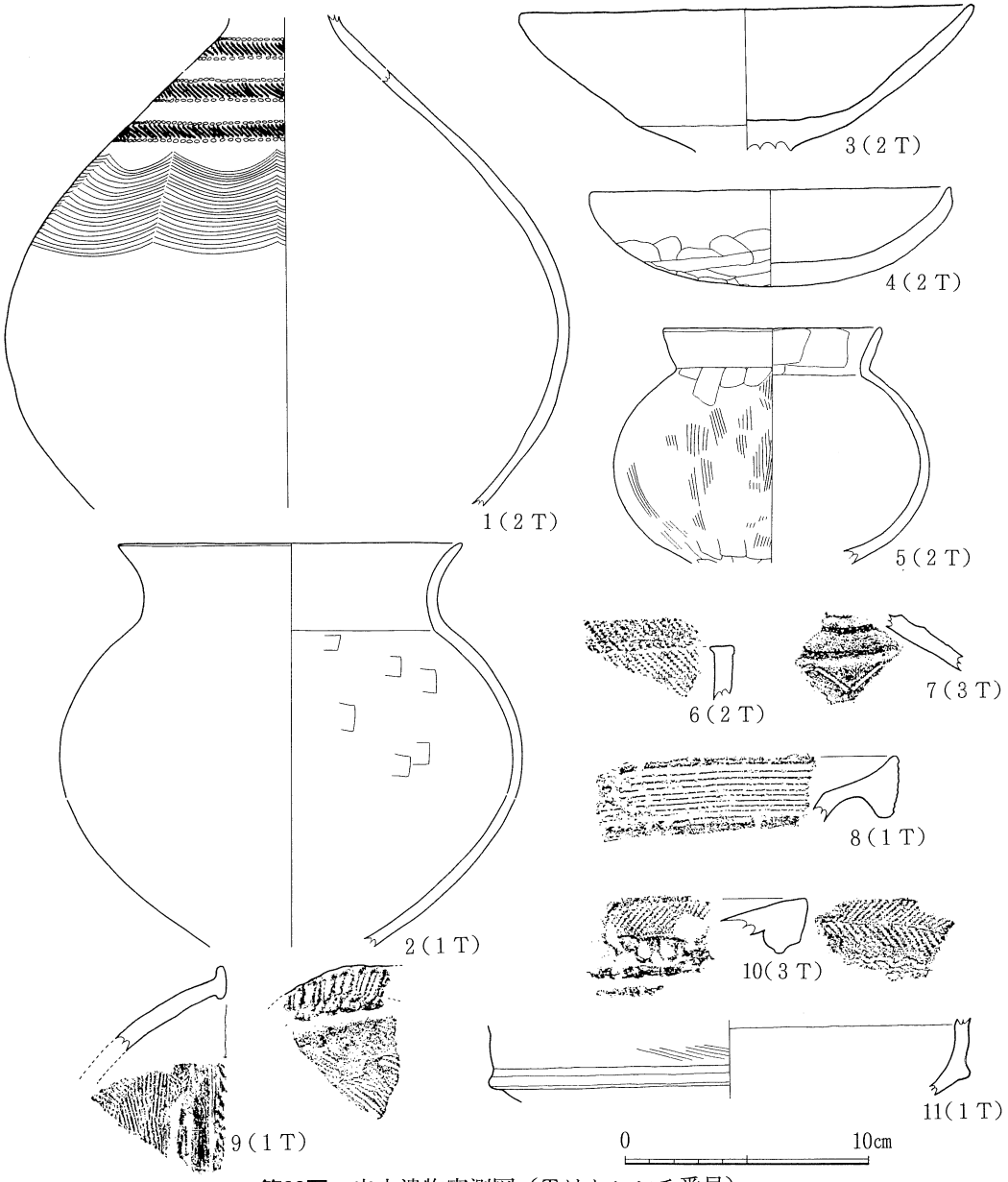
そのほかの遺構等

溝・土坑等が確認されている。いずれも、その一端が捉えられたに過ぎず、将来的には、別種の遺構となる可能性はある。

また、住居等とは判断しえなかったが、遺構確認面において、覆土状の黒色土の広がりが明らかになっている。一部サブトレンチを設定してロームを露出させ、その性格について検討した。当該部分においては、通常の床状は呈しておらず、凹凸の激しいロームが露呈した。耕作の影響の可能性も皆無とは言いがたいが、比較的遺存状況の良好な遺物の出土も認められるところから、それ以外の、土地に対する働きかけの痕跡と考えておきたい。現段階では、抽象的な言い回しに終始せざるをえないが、この点については、今後予定される本調査によって明らかになることと思われる。

遺　物

今回の調査では、多様な遺物の出土があった。様相としては、菊間遺跡に近似している感がある。明らかに遺構に伴うという遺物ではないが、遺跡全体の様相を知る上での手掛かりとなるものと位置づけられよう。かなり断絶があるが、縄文時代から平安時代にいたる時期の遺物が出土している。弥生時代に関しては、中期宮の台式をわずかに含むが、総体的には弥生時代後期の遺物が多い。紙面上の制約もあり、ここでは特徴的な遺物についてのみ図示しておく。いわゆるパレス壺の口縁部(7・8・10)、手焙り形土器の天井部の口縁部(9)といったいわゆ



第22図　出土遺物実測図（Tはトレンチ番号）

る外来系の遺物もわずかに認められる。手焙り形土器の下半部と思われる破片(11)もあり、これについては、口縁部破片の個体と同一の可能性がある。古墳時代の土器は、量的には、弥生時代の土器ほど顕著ではない。なお、東関山古墳の時期を反映するような遺物は抽出し難い。須恵器の坏、円筒埴輪の破片は確かに存在するが、積極的に東関山古墳との関連を主張しうるものではない。また、布目瓦片や平安時代の所産と思われる土器の出土もみられる。瓦に関しては、いずれも小片であり、瓦当面を残すものはない。いわゆる菊間廃寺との関連のなかで捉えるべきものと考えられる。平安時代の土器については、底部糸切り無調整のロクロ土師器などがあるが、図示しうるほど遺存状況の良好な遺物はほとんどなかった。

小　結

限られた部分の調査であり、周辺一帯に展開しているであろう遺跡の一端を垣間見ることができたにすぎない。しかし、集落の存在、V字溝の存在、東関山古墳の周溝の確認等、得た所は大きかったと言えよう。今後予定される本調査においては、より遺跡の実態が明らかになる事と思われる。

菊間国造の本拠地といわれる、本遺跡周辺における歴史の動向が必ずしも明瞭になっていない事は、すでにふれた通りである。当地域における弥生時代集落の成立、環濠集落の出現と解体の様相についてあきらかにする事が求められる。また、古代史学側の成果から6世紀代に成立したとされる国造制と、新皇塚古墳を含む菊間古墳群の実際の消長との整合性について検討する必要があろうし、また、通俗的にいわれるように古墳から寺へといった、首長を象徴するような構築物の転換、さらには、それらを可能にした社会構成の追求も不可欠である。一朝一夕にそれらに対する解答が見出されるわけではなく息の長い取組が必要であろう。

注・参考文献

第1章　(1)山口直樹他「千葉県市原市 小田部新地遺跡」㈶市原市文化財センター調査報告書第2集 1984

(2)大村　直『小田部向原遺跡』「市原市姉崎宮山遺跡・小田部向原遺跡・雲ノ境遺跡」㈶市原市文化財センター調査報告書第40集　1991

(3)天王台古墳群の一角をしめる天王台遺跡が調査されている。
木對和紀「市原市　中潤ケ広遺跡」㈶市原市文化財センター調査報告書第27集　1988

(4)大村　直「千葉県市原市　下鈴野遺跡」㈶市原市文化財センター調査報告書第16集　1987

(5)田中清美「千葉県市原市　川中遺跡」㈶市原市文化財センター調査報告書第13集　1987

(6)平成元年度に農道改良工事に先行する調査を行い、住居跡等が検出された。

(7)斎木　勝他「市原市菊間遺跡」㈶千葉県都市公社　1974

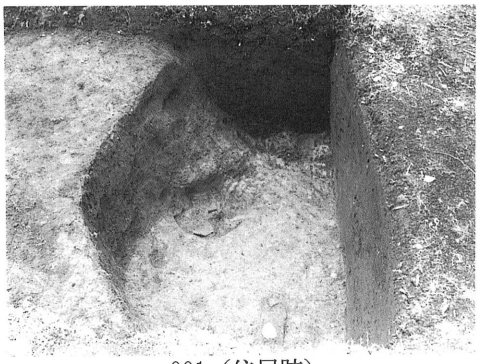
(8)近藤　敏『菊間手永遺跡』「市原市文化財センター年報　昭和58・59年度」㈶市原市文化財センター　1985

(9)市原市菊間字寺の台にその存在が想定されている。現在でも瓦片の散布が認められるが、遺構等は確認されていない。かつて採集された瓦の一部が紹介されたことがある。
『菊間廃寺』「房総の古瓦」千葉県立房総風土記の丘図録　1978

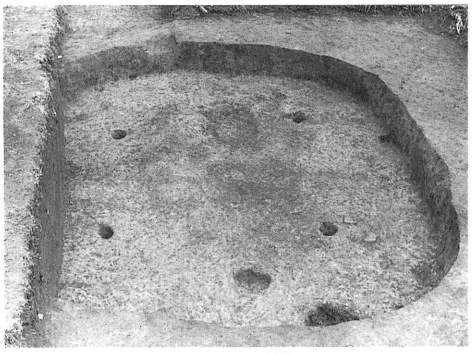
第4章　(1)市原郡教育会「千葉県市原郡誌　町村誌篇」㈱国書刊行会　1985

東官台遺跡

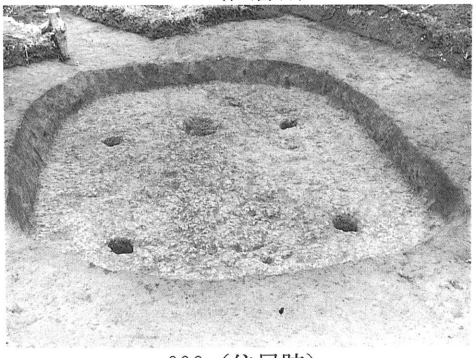
調査前風景



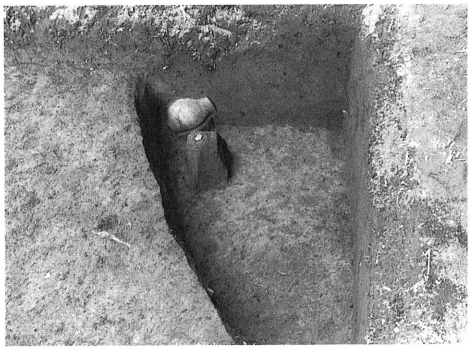
001（住居跡）



002（住居跡）



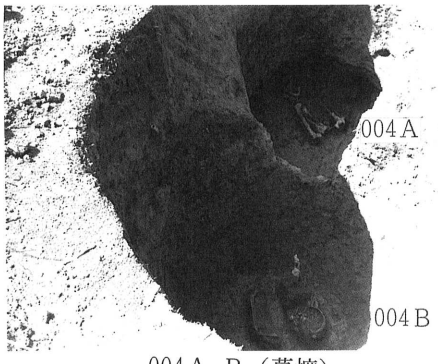
006（住居跡）



005（住居跡）

007（住居跡）

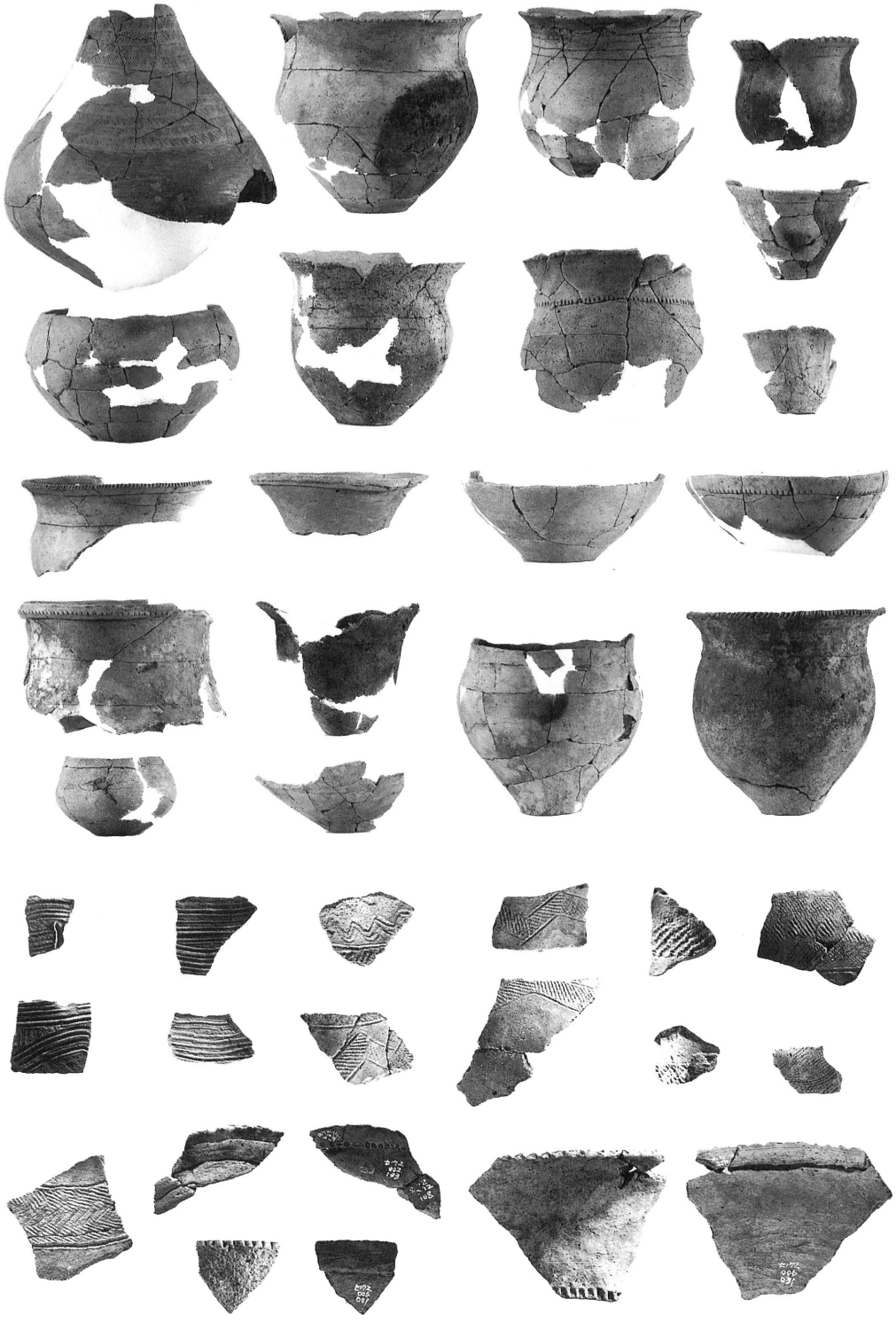
003（墓壙）



004A　B（墓壙）

図版２

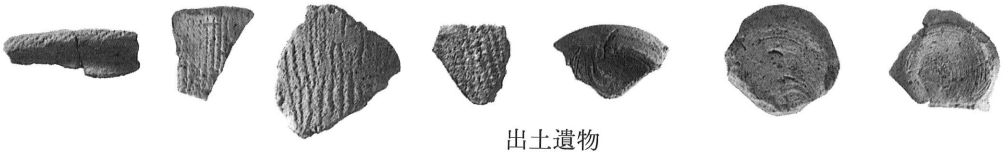
東官台遺跡出土遺物



溝谷遺跡

調査前風景

第２トレンチ全景



出土遺物

月崎寺の台遺跡

調査前風景

第３トレンチ遺物出土状況

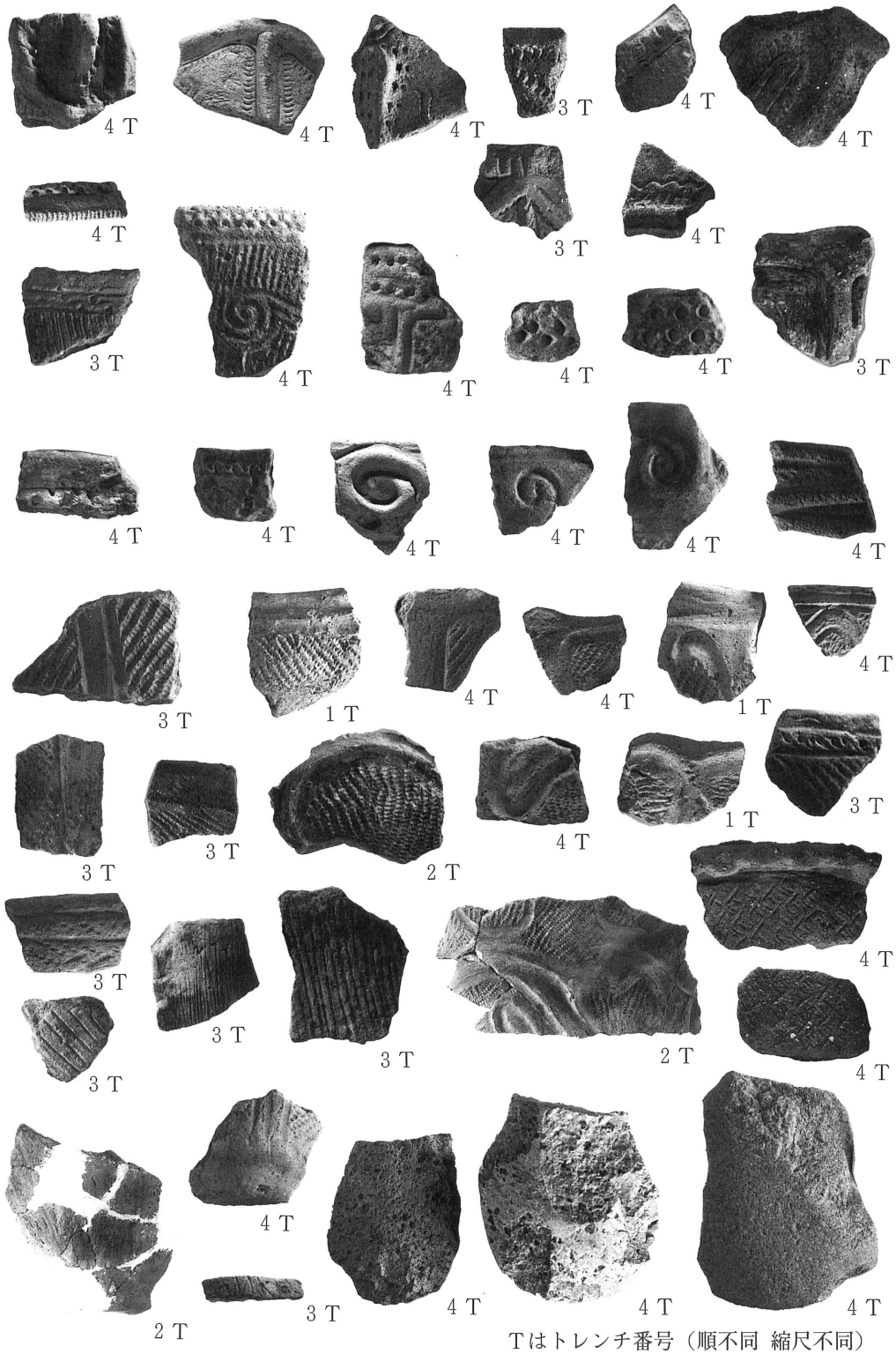
１トレ土坑検出状況

土器片錘

石鏃

図版４

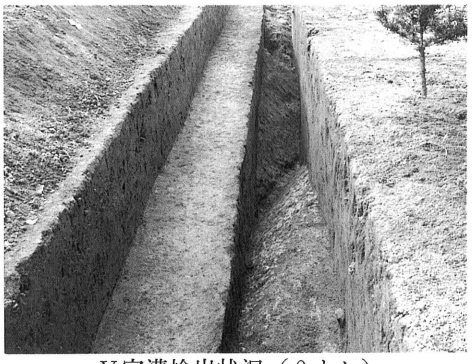
月崎寺の台遺跡出土遺物



Ｔはトレンチ番号（順不同 縮尺不同）

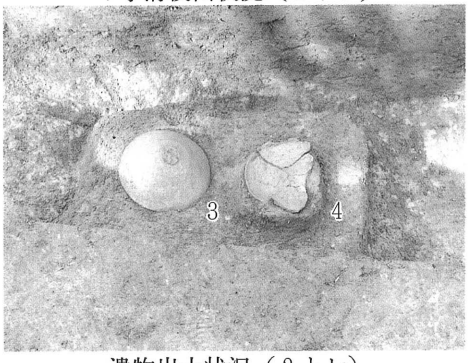
菊間深道遺跡

調査前風景

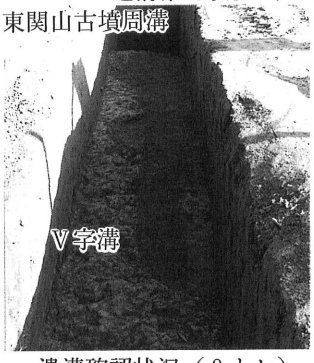


Ｖ字溝検出状況（２トレ）

遺溝確認状況（１トレ）



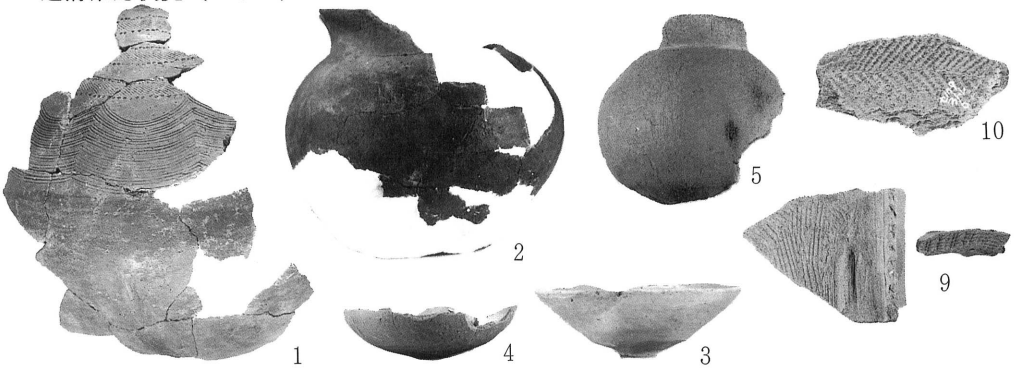
遺物出土状況（２トレ）



遺溝確認状況（３トレ）

遺溝確認状況（２トレ）

遺溝検出状況（１トレ）



平成５年度市原市内遺跡発掘調査報告

平成６年３月 25 日　印 刷

平成６年３月 29 日　発 行

編　集　　財団法人　市原市文化財センター

市原市能満 1489 番地

発　行　　千葉県市原市教育委員会

市原市惣社 1040 －１ 番地

印　刷　　三陽工業株式会社

市原市五井 5510 －１ 番地